巻頭言 preface

勤倹のすすめ

名古屋大学総長　加藤延夫

Nobuo Kato, M.D., Ph.D.
President, Nagoya University

名古屋大学の大部分の学部を容する東山キャンパスの電気の需要は急速に増え続ける一方で、特別高圧受変電設備を緊急に更新しなければならなくなった。他のキャンパスでも電気の需要は増え続けている。毎年、夏場のクーラー使用時期には節電の必要性が叫ばれる。

このごろは街で見るどのビルでも、快晴の日でもどの部屋も電燈がこうこうと輝いている。大学でも用があって誰かの研究室を訪ねるとき、電燈がともっているか否かが、その部屋の住人の在・不在をあらわす目印の代わりになっている。廊下や階段は夜・昼を問わず電燈がつきっぱなしになっていることが多い。

太平洋戦争が激化した昭和19年、20年は、旧制中学の3年、4年生であったが、学徒勤労動員で学校での勉学の機会は完全に失われた。夜は電燈の光が屋外に漏れないように燈火管制が布かれたために、燈火に親しんで読書をする習慣は全くなくなってしまった。敗戦後電力事情は悪く、夜みんなが電燈をつけるころには、一定時間停電することがしばしばであった。試験の前など、そのためにろうそくを何本か用意したことを思い出す。ろうそくも貴重品で手に入らないこともあり、そんなときは停電のときは寝て、みんなが寝静まってから起きて勉強することもあった。

成長期にこんな経験をしたので、電気は貴重なものであるという考えがしみついている。それで、昼間廊下に電燈がついたままになっていると、いつも消して歩く。こんな姿を人は笑う。

昭和42年、43年のおよそ2年間ドイツのギーセン大学医学部に留学した。ある特殊の処理をして、光があたると死んでしまうようにしたウイルスを取り扱う実験を数ケ月する必要に迫られた。その間は昼間寝て、夜中に仕事をした。研究室の廊下の一部や階段の電燈のスイッチは、一定時間経つと自然に消えるタイプで、実験材料に影響を与えないようにゆっくりと歩かなければならないときなど、目的の実験室に着く前に途中で電燈が消えてしまってたいへん困った。次のスイッチの所まで、大切な実験材料を片手に手探りで辿りつくのに苦労した。ドイツ人の倹約の精神を垣間見る思いがした。当時、ヨーロッパ各国を旅行するとドイツの裕福さが際立つように思われたので、この節電のスイッチに矛盾めいた感じがした。

わが国の国際協力事業団（JICA）の要請により、インドのラクナウ近郊の医系大学院大学であるサンジャイ・ガンジー医科学研究所への医療機材無償供与計画と、それに引き続いて実施された医療協力計画に、昭和61年から携わってきた。医療機材供与計画の実施に際しては、JICA 調査団が何度も派遣されて、インド側の希望する機器が実際に現地で働くか否かについて、考えられるすべての条件を綿密に調査した。電気、水道、設置される部屋の空気、扱う技術者、故障の際の修理能力などから、最先端機器に属するものは供与機材リストから除外され、大丈夫と確信がもてるもののみが選定され、総額およそ33億円相当の機器が供与された。しかし、電圧の変動が激しい上に停電が頻繁にあり、そのため多くの機器が故障し、その対応に苦慮している。放射線医学関連の機器では、部屋の床にバッテリーをたくさん繋いで置き、充電して、そこからの電流で機械を動かすようにしている。

昨年10月、名古屋大学と学術交流協定を結んでいる中国の大学を歴訪した。どの大学でも、広大なキャンパスに宏壮で個性的な建物が立っている様に感銘を受けた。没個性的、画一的で貧弱なわが国の国立大学の建物の現状を悲しく思っている私にとってうらやましくさえ思えた。しかし、一歩建物の中へ足を踏み入れると、電燈は少なかったり、はずされていたりして、うす暗く、厳しい電力事情が察せられた。

わが国は、敗戦後の一時期を除き、電力について他の多くの国々と比較にならぬくらい恵まれている。安定した電圧の電気が供給されるのは、むしろ当たり前で、そのことを特に意識することもない程である。

昭和一桁生まれ以上の年代の者は小学校の時から勤倹を至上の目標とする教育を受けてきた。どの小学校にも薪を背負って歩きながら本を読む二宮尊徳の少年時代の銅像が立っていた。勤倹貯蓄の熟語は私の頭脳に強く深く刻みこまれていて、容易には消えないし、変わらない。

このごろ、不景気を脱する最善の方策は内需の拡大であり、国民の消費を刺激するために、今年収めた税金の2割が還付されるという。内需拡大、消費刺激は結局むだ使いの奨励と同義語のような気がする。限りある地球の資源を如何に長く大切に利用するかは、地球環境の保全の問題と共に、人類が絶滅から免れるための重要な課題であることは今更言うまでもない。このためにも倹約を旨とする生活は正しいと思う。また、勤倹のもう一つの意味の勤勉は日本人の長年培われてきた特性であり、この特性が今日の我が国の発展の基盤になっているのは疑い無い事実である。したがって“勤倹教育”は現在でもなお、重要な教育理念の一つであり続けるべきであると考える。国が旗を振って、むだ使いを奨励したり、勤勉から怠惰への傾向を助長するかのような政策はいかがなものであろうか。